
変わらない愛を永遠に...

音符

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わらない愛を永遠に…

【Nコード】

N4279F

【作者名】

音符

【あらすじ】

組織を倒した後のコナンと哀のお話です。CPはもちろんコナンなので苦手な方はBackお願いします。

第一話

コナンと哀は一ヶ月前組織を倒した

だが肝心のAPTX4869のデータはジンに消滅されてしまった

コナンと哀はそのまま生きる決意をして、いつも通り生活を始めた

「おはよう哀ちゃん、コナン君！」

歩美が元気に挨拶をしてくる

それにコナンと哀も

「おす

「おはよう」

と返す

いつもの光景だ

そのまま学校へ向かって、コナンと哀にとっては退屈で仕方がない授業を受けて帰宅する

放課後…

いつもの公園に少年探偵団が集まっていた

コナンと光彦と元太はサッカーを、哀と歩美は座って話しをしていた。

「・・・でね、って哀ちゃん？聞いてる？」

「えっ・・・あ、ごめんなさい・・・ちょっとぼーっとしてたみたい・・・」

実は哀はぼーっとしていたわけでは無く、サッカーをしているコナンに見とれていたのだ

「ねえ、哀ちゃんってさ・・・コナン君の事好きなんじゃない？」

「えっ、なんで私が江戸川君を・・・」

「だって哀ちゃんさっきからコナン君の事見てるんだもん」

歩美は気付いていたようだ

「・・・そうよ。私は江戸川君の事が好きよ・・・」

「だったら早く告白しなくちゃ！でないと他の子にコナン君取られちゃうよ！？」

「でも・・・」

哀は迷っているようだった

「哀ちゃん・・・逃げてはっかじゃだめだよ！自分の気持ちちゃんと伝えなきゃ！！コナン君だって絶対分かってくれるって！」

「吉田さん…ありがとうございます。私、今日にでも彼に気持ちを伝えるわ」

「うん。頑張ってね哀ちゃん！」

哀はコナンに告白する事にした。

第二話

コナンに気持ちを伝えると決めた哀

帰り道で二人になった時に言おうと考えていた

「じゃあまた明日な」

「おう」

コナンたちはいつもの曲がり角で別れた

歩美は哀に

「頑張つてね！」

と小声で言っただけで帰って行った

二人だけになった帰り道

コナンも哀も黙って歩いている

その時哀が口を開いた

「工藤君……」

「なんだ？」

「あの…その…話があるんだけど、いいかしら？」

「ああ、構わないぜ」

「あのね…私…工藤君の事が…好き…ずっと前から好きだった…」

「…灰原…今なんて…？」

「だから、貴方の事が好きって言ったのよ」

その瞬間、コナンが哀を抱きしめた

「…く…工藤君…？／／／」

「灰原…いや、哀…俺もおめえの事が好きだ」

「ほんと、に…？」

「ああ、ほんとだ。世界中の誰よりも哀、おめえが好きだ」

「…工藤君…ありがとう」

こうして二人は恋人同士になった。

次の日

少年探偵団はまたいつもの場所に集まった

「おはよう哀ちゃん！」

「おはよう」

「コナン君とは上手くいった？」

「ええ。吉田さんのおかげよ。ありがとう」

「良かったね哀ちゃん」

その時コナンが来た

「悪い遅くなっちまって」

「全然いいよ。じゃあ行こっか」

コナン達は歩き出した

「おはよう」

哀がコナンに声をかける

「おはよう。なあ、哀…今日おめえん家泊まりに行っていていいか？蘭が空手の合宿で居ねえんだよ。おっちゃんは麻雀で遅くなるって言うってたし」

「別に構わないわよ」

「サンキュー」

二人が話していると学校についた

そしてその日の帰りまでにコナンと哀が恋人同士になった事が知れ渡った。

第三話（前書き）

前に書き忘れましたが、予告なしに作者名を変えてしまっ
て本当に
すいません；

第三話

その日の放課後

コナンは哀の家に向かった

「哀、来たぞ」

「工藤君…いいわよ入って」

コナンはソファアームに座って哀とコーヒーを飲んでいた

「あれ、そういえば博士は？」

「博士なら出掛けてるみたいよ」

「そうか」

「それより夕食何がいい？」

「おめえが作ったもんなら何でもいいよ」

それから暫くして夕食が出来た

メニューはカレーだ

「いただきます」

「どっぴ…っ？」

「すっげえ上手い！さすが哀だな」

「／／／／そう。ありがとう」

「哀、口開ける」

コナンがスプーンを差し出す

「ちよっ／／／／何してるのよ」

「いいだろ、誰もいねえし」

「もう、しょうがないわね」

哀は顔を赤くしながらそれを食べた

夕食を食べ終わった二人は片付けをしてソファーに座っていた

「哀……」

コナンは哀の肩に手を回して抱き寄せた

「工藤君／／／／どうかした？」

「いや、ただこうしてただけだよ」

「そっ」

コナンは哀を抱く手に力を込めた

それに気付いた哀もコナンの肩に頭を乗せる

暫くその体制でいたが、突然コナンが手を離れた

そして…

「哀…キスしていいか？」

「…嫌って言ったらどうするの？」

「無理矢理でもする」

「クスツ…貴方らしいわね。大丈夫よ、心配しなくても…嫌じゃないから／＼／＼」

「哀…」

「工藤君…」

二人は見つめ合うと唇を重ねた

それから一時間後、博士が帰って来た

「ただいま哀君…おお、新一も来ておったか」

「ああ、今夜は泊まらせてもらっから」

「ああ、哀君から聞いておるぞ」

そう言うと博士は自室に行った

「じゃあ私も寝るから。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

コナンと哀もそれぞれの部屋で眠りに就いた

第四話

次の日

コナンが起きると哀が朝食の準備をしていた

「おはよう、哀」

「工藤君、おはよう」

十分くらいして朝食が出来あがり博士も起きて来た

朝食を食べ終わってからコナンは哀をデートに誘おうと考えていた

「哀、今日二人でトロピカルランド行かねえか？」

「ええ、いいわよ」

「よし決まり！じゃあ俺帰って準備するから九時に駅前な」

「分かったわ」

コナンは探偵事務所へ走って戻った

「ただいま」

「お帰りコナン君」

「あ、蘭姉ちゃん、僕これから哀とトロピカルランドに行って来る

から

「あら、もしかしてデート？」

「う、うん／＼／」

コナンは急いで支度をして駅前まで走って行った

既に駅前には哀が来ていた

「悪い、待ったか」

「いいえ、私も今来たところだから」

コナンと哀はトロピカルランドへ向かった

「人がいっぱいだな…はぐれないようにしないとな」

コナンは哀の手を握った

「／＼／＼工藤君」

「こうしてれば心配ないだろ？」

哀もコナンの手を握って歩き出した

二人は始めにジェットコースター乗り場へ向かった

一時間程並んでジェットコースターに乗った

そのうちにお昼になったので二人は店に入った

料理を注文して数分後、ウェイトレスが料理を運んで来た

コナンが料理を食べていると

「工藤君…はいあ〜ん／／／／」

「なっ何してんだよ哀／／／／」

「昨日のお返しよ」

「…ったく／／／」

コナンは顔を赤くしながら食べた

それから昼食を食べ終わった二人はお化け屋敷に入った

「ばあ〜」

お化けが脅かしてくるがコナンも哀も怖がらない

その時お化けが哀の肩に触れた

「きゃあっ!」

さすがに哀はびっくりしてコナンに抱き着いた

「哀／／／おめえも可愛いところあるんだな／／／」

「／／／／／」

それから二人はお化け屋敷からでて、ベンチに座って休憩していた

「大丈夫か哀？疲れてないか？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう…心配してくれたんでしょ？」

「そ、そんなんじゃないよ／／／／／」

「顔赤いわよ？」

「バ、バーク、夕日のせいだよ／／／／／」

コナンは更に顔を赤くした

「哀、観覧車行くぞ／／／」

「え、ちょっと…」

コナンは哀を引っ張って観覧車に乗り込んだ

「…ごめんなさいね。さっきはちょっと意地悪しすぎたわ」

「いいんだよ。俺が素直になれなかったから」

「え…？」

「だから…おめえが心配だったんだよ！／／／／」

コナンの顔は真っ赤だ

「ありがとう…コナン／／／／」

哀はコナンの事を名前で呼んだ

そしてコナンが驚いている隙にキスをした

「あ、哀…／／／／」

「大好きよ…コナン」

「哀…俺もおめえが大好きだ」

コナンと哀は唇を重ねた

その後二人は帰宅した

そしてコナンも哀もうれしい事があったためその日の夜はなかなか眠れなかった

第五話

今、偵丹小は冬休み

コナンは哀の家に来ていた

「哀、ちょっと相談したい事があるんだけど…」

「何？」

コナンは真剣な顔で話し始めた

「俺…探偵事務所を出ようと思うんだ…」

「え？どうしたの急に」

「実はな、昨日おっちゃんが別居をやめてまた元通りに暮らすって言い出したんだよ。そこに俺が居たら邪魔になるだろ？だから工藤邸にでも引越そうと思うんだ」

「そう、毛利探偵が。でも貴方が引越す理由はどうするのよ」

「…俺の両親が死んだ事にして親戚の工藤家が引き取ったって事にすればいいと思う」

「そう…有希子さんには言ったの？」

「ああ。あっさりOKしてくれたぜ。……それでさ…もし良ければ俺と一緒に住まないか？」

コナンの哀も一緒に住まないかと言う言葉に哀は驚いた

「えっ!?!」

「母さんが哀が良ければそうしろって言ってたんだけど…どうだ？俺としては出来れば一緒に住んでほしいんだけど…」

哀は少し考えた後

「…私は構わないけど…ほんとにいいの？」

と言った

「もちろん。当たり前だろ」

それにコナンは即答した

「ありがとう。これからよろしくね？名探偵さん」

「こちらこそよろしくな、哀」

コナンと哀は見つめ合い唇を重ねた

それから一週間後にコナンと哀は工藤邸に引越した

もちろん暫くは有希子も一緒に暮らす

有希子は哀の事を相当気に入ったらしく、娘が出来たみたいと喜んで
いる

これから二人の新しい生活が始まる

第六話

コナンと哀が工藤邸に暮らし始めて早一週間

二人共この生活に慣れてきていた

ある朝

「哀ちゃん、悪いけど新ちゃん起こして来てくれる?」

「はい」

哀はコナンを起こしに行った

「コナン、朝よ。起きて」

「…ん。あ、哀、おはよう」

コナンは起きるなり哀に抱き着いた

「ちょっと／＼／＼／＼コナン!？」

「ちょっとだけ」

「もう…」

哀もコナンの背中に手を回した

それから下に行って三人でご飯を食べた

「ねえ新ちゃん…悪いんだけど私今日ロスに戻らないといけなくなっちゃったの。今度いつ戻れるか分からないからよろしくね」

「ああ、分かったよ」

「哀ちゃん、新ちゃんをよろしくね」

「はい、任せてください」

「ありがとう。新ちゃん、哀ちゃんに変な事しちゃだめよ」

「分かってるよ！／／／／」

その日の夕方、有希子はロスへ帰って行った

夕食後

「母さんがいないと静かだな」

「あら、寂しい？」

「んなわけねえだろ！俺には哀がいるんだから」

コナンは洗い物をしている哀を後ろから抱き締めた

「コナン／／／ありがとう。……洗い物まだ途中だから離してく

れる？」

「…嫌だ」

コナンは哀を抱き締める腕に力を入れる

「あと少しで終わるから」

「…分かったよ」

コナンが手を離したので哀は残りの洗い物をやり始めた

洗い物が終わった哀はコーヒーを入れてコナンの所へ行った

「はい、コーヒー」

「お、サンキュー」

二人はコーヒーを飲みながら話していた

暫くしてコナンが隣を見ると、哀がコナンにもたれ掛かって寝息をたてていた

「哀／＼／＼」

コナンは哀を起こさないようにそっと立ち上がると、毛布を持って来て哀に掛けた

そして電気を消すと哀の隣に座ってその肩を抱き、暫く寝顔を見つめていた

コナンは哀の頬に軽くキスをすると眠りに就いた

夜中に哀は目を覚ました

「ん…あ、私…あのまま寝ちゃったのね」

その時自分に毛布が掛かっている、更に隣から寝息が聞こえる事に気付いた

「コナン／＼／＼／＼…毛布ありがとね」

哀はそっとコナンにキスをして毛布を半分コナンに掛けるとまた眠りに就いた

朝、コナンが目覚めると哀はまだ寝ていた

コナンは自分にも毛布が掛かっている事に気づき、ふっと微笑んだ
そのうちに哀が目覚ました

「…ん。おはよう、コナン。毛布ありがとね」

「いいんだよ。おめえこそ俺に毛布掛けてくれてありがとね」

コナンと哀は微笑み合つと唇を重ねた

その日もコナンと哀は仲良く過ごした

第七話

明日はクリスマス

そのせいか町もいつもより賑やかだ

商店街やデパートはプレゼントを買う人でいっぱいになっていた

コナンは哀にあげるプレゼントを前々から決めていた

コナンは注文しておいたそれを取りに行く事にした

「哀、俺ちよつと出掛けて来る」

「ええ。いってらっしゃい」

コナンは家を出ると、宝石店へ向かった

「いらっしやいませ」

「あの、この前注文した物を取りに来たんですけど…」

「江戸川様ですね。少々お待ち下さい」

暫くして店員が戻って来た

「こちらの品でよろしかったですか？」

「はい。ありがとうございます」

コナンはそれを受け取ると走って家に帰った

「ただいま」

「お帰り。どこ行ってたの？」

「ああ、ちょっとな…」

「それよりご飯出来てるから食べましょ？」

「ああ、そうするよ」

コナンと哀は仲良く夕食を食べた

片付けが終わった二人はそれぞれソファーに座って本を読んでいた

一時間ほどして哀が本を閉じた

「コナン、私先にお風呂入って来るから」

「…ああ」

「覗いたら一週間口きかないわよ」

「そ、そんな事しねえよ！／＼／＼」

コナンは顔を真っ赤にしながら言った

哀はそんなコナンを見てクスツと笑ってから風呂場に行った

「まったく、哀の奴絶対俺の反応見て楽しんでやがる」

コナンはぶつぶつ言いながらもまた本を読み始めた

暫くして哀が風呂から出て来た

「お待たせコナン。お風呂いいわよ」

「ああ」

コナンは本を閉じると、風呂場へ行った

哀は自分の部屋に行って雑誌を読み始めた

暫くして哀が寝ようとした時、コナンが部屋にやって来た

「コナン…どうしたの？」

「いや、その…なかなか眠れなくてな…なあ、一緒に寝てもいいか？」

「／／／いいけど、私のお願い聞いてくれる？」

「いいよ。何だ？」

「…キスして？」

「えっ？／＼／＼／＼それだけでいいの？」

「うん…」

哀が返事をする。コナンは哀に口付けた

「これでいいか？」

「うん／＼／＼ありがとう」

ちゅっ

「あ、哀／＼／＼／＼」

哀はコナンに軽くキスをするとベットに入ってしまった

コナンもベットに入ると哀を抱き締めた

「おやすみ、哀」

「／＼／＼おやすみ…」

コナンと哀は仲良く眠りに就いた

第八話（前書き）

更新遅くなりました・あと、この質問に誰か答えて下さい
んの誕生日っていつですか？
哀ちや

第八話

朝、コナンが目を覚ますと、哀はまだ寝ていた

コナンは哀をぎゅっと抱き寄せると、哀の頭を優しく撫でた

哀は気持ち良さそうな表情をしてコナンにすり寄ってくる

「…ん」

その時哀が目を覚ました

「おはよう。寒くなかったか？」

「おはよう。大丈夫よ。…貴方の身体が温かったから／＼」

「／＼／＼／＼そうか、それなら良かった」

二人は朝食を食べて話しをしていた

「なあ、哀…今夜さクリスマスツリー見に行かないか？」

「ええ、いいわよ。でも貴方からそういうのに誘うなんて珍しいわね」

「んだよ、悪いか？」

「別に悪くないわよ。…私も誘ってもらった方が嬉しいから／＼」

哀はそう言うとコナンにもたれ掛かった

コナンも珍しく甘えてくる哀が可愛くて、哀の肩を抱いた

二人は暫くその体制でいた

夕方六時…

すっかり日が落ちて町は夜の姿に変わった

コナンと哀は夕食を早めに食べると、クリスマスツリーのある場所まで歩いて行った

ツリーの周りには人がいっぱいいた

コナンと哀もツリーの前に立ち、手を繋いでいた

「綺麗ね…」

「そうだな…」

コナンは昨日貰って来たプレゼントを哀に渡そうと思い、哀に箱を差し出した

「ほらよ…」

「何…?」

「クリスマスプレゼントだよ。／＼／＼」

コナンは少しだけ顔を赤くしながら言った

「ありがとう」

「開けて見るよ」

「うん…」

哀が箱を開けると、その中には

『C t o A』

と書かれたネックレスが入っていた

「コナン…ありがとう。」

「着けてやるよ」

コナンは哀にネックレスを着けた

シンプルなそれは哀にとてもよく似合った

「ほんとにありがとう……でも私何も用意出来なかったからこれで

我慢して…」

哀はコナンを抱き締めると唇を重ねた

「哀…／／／／／」

「メリークリスマス／／／／」

コナンも哀も顔を赤くしてツリーを見ていた

第九話（前書き）

この前の質問の答えがわかりました
協力してくれたみなさん、
ありがとうございます！
あ

第九話

今は二月

二月といえばもちろんバレンタインだ

哀もコナンにチョコを渡そうと考えていた

「ん〜…やっぱり手作りの方がいいわよね…」

哀は早速試しにチョコを作ってみる事にして、材料を買いに行った

材料を買って来た哀は早速作り始める事にした

ちなみにコナンは出掛けているため、家にいない

三十分後

「ふう…出来たあ」

哀は試しにチョコを一口に入れた

「あ…おいしい」

哀はその味に満足すると、チョコペンで

『I LOVE YOU』

と書いて箱に入れた

「コナン喜んでくれるかしら……」

その時コナンが帰って来た

「ただいま」

「おかえりなさい。早かったわね」

「そうか？まあ早くおめえに会いたかったからよ／＼／＼」

「／＼／＼……そう。ありがとう」

顔を赤くして行ったコナンに哀も顔を赤くして答えた

次の日

「コナン、朝よ。起きて」

哀がいつものようにコナンを起こしに行った

だがコナンはなかなか起きようとしない

「……ん……哀……」

コナンは哀の腰に抱き着くと自分の方に引き寄せた

おかげで哀はコナンの上に倒れ込む形になってしまった

「きゃっ！ちょっとコナン！」

哀は身体をひねってコナンの方を向くと耳元で

「コナン、朝だから起きて。…キスしてあげるから」

と言った

その言葉にコナンは起きた

「ほんとか？」

「…バカ」

哀は哀はコナンに顔を近づけると、唇を重ねた

朝食を食べた二人はリビングで座って話していた

「ねえ、今日何の日か知ってる？」

「今日…？さあ…何かあるのか？」

「…はい、これ」

哀はチョコの入った箱をコナンに渡した

「ん？何だ？」

「だから、バレンタインだから貴方にチョコ／＼／＼／」

「まじか！？サンキュー。食べてもいいか？」

「ええ、いいわよ」

コナンは包みを開けるとチョコを取り出して口に入れた

「うまい！これ哀が作ったのか？」

「…うん」

「最高だぜ？このチョコ。また作ってくれよな」

「ありがとう」

コナンと哀は唇を重ねた

第十話

ある日曜日

コナンと哀はデートの約束をして二人で出掛けていた

二人が商店街に入ろうとした時、通り掛かった近くの銀行から銃声が聞こえた

「な、何？」

「哀、おめえはここで待ってる！すぐ戻って来るから」

コナンはそう言うところそり銀行の中に入って行った

周りの様子からして、銀行強盗だろう

「おい、この鞆に金を入れろ！他の奴らは俺が外に出るまで動くなよー！」

強盗犯はそう言いながら辺りを見回す

その時出入口に立っている哀が強盗犯の視界に入った

強盗犯はニヤリとすると哀の首に手を回して銃を突き付けた

「おい、早く鞆を持って来い！このお嬢ちゃんがどうなってもいいのか！？」

「哀!!」

「コナン!助けて!!」

哀は必死にもがくが、強盗犯に

「おとなしくしないと撃つぞ!」

と言われて力を抜いた

「その眼鏡のボウズ、鞆を持って来い」

強盗犯はコナンに鞆を持って来るように言った

コナンはいつもならサッカーボールで犯人を倒せるのだが、今は哀を人質に取られている為下手に手が出せない

仕方無くコナンは鞆を持って強盗犯に近づいた

「おじさん、この鞆を渡したら哀を離してくれる?」

「ああ、いいとも。離してやるよ」

それを聞いたコナンは鞆を強盗犯の近くに置いてしゃがみ込んだ

「ん?どうしたボウズ」

「ちょっとお腹が痛くなっちゃって...あはは」

コナンはそう言いながらこっそりとキック力増強シューズのダイヤ

ルを回した

「早くしろ！」

強盗犯が叫んだ瞬間、コナンは立ち上がり鞆を思い切り蹴った

鞆は見事に命中して強盗犯は倒れた

哀はその隙にコナンの元に駆け寄った

「哀、大丈夫か！？怪我とかないか？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとね、助けてくれて」

「哀が無事ならいいんだよ」

それから二人は事情聴取を受けて帰宅した

「あゝあ、散々なデートになっちまったな」

「あら、私は楽しかったわよ」

「おめえなあ…」

コナンは半ば呆れながら言った

「もっとおめえと楽しみたかったのに…」

「別に一緒に住んでるんだからいいじゃない」

「そうだけだよ…」

こつこつ時に子供っぽいコナン

哀は仕方なさそうに

「もう、しょうがないわね…」

と言ってコナンにキスをした

「哀…？／／／」

「一緒に寝てあげるからそれで我慢して？」

「…まあ、今日はそれでいいか」

哀とコナンは同じベットに入った

コナンは哀を抱き枕みたいに抱き締めている

「ちょっと…そんなにくっ付かなくても／／」

「いいだろたまには」

「もう…」

コナンと哀は仲良く眠りに就いた

第十一話

コナンと哀は小学二年生になっていた

なぜか少年探偵団は皆同じクラスになって今まで通り仲良くやっている

コナン達が二年生になり早三ヶ月

今日、帝丹小は終業式だ

つまり明日からは夏休み

その日の帰り

「明日のキャンプ楽しみだね！」

「そうですね」

「俺明日は寝坊しないように頑張るぜ！」

「本当ですか？元太君」

「本当だよ！！」

歩美、光彦、元太が明日のキャンプについて話している

「はあく…暑いのに元気だよな、あいつら」

「仕方ないわよ。明日はあの子達が楽しみにしているキャンプなんだから」

そんな事を話しながら家に帰った

「コナン、何か冷たいものでも飲む？」

「ああ、悪いな」

「アイスコーヒーでいい？」

「ああ」

哀は二人分のアイスコーヒーを作るとリビングへ行った

「はい」

「サンキュー」

哀はコナンの隣に座った

「…明日のキャンプ、何も起こらないといいわね…」

哀が心配そうな顔をして言った

「え…?」

「だってキャンプって絶対何か事件が起きるでしょ？博士がテントを忘れたり、誰かが迷子になったり…」

「確かに…。まあそうならない事を願うしか…」

「…そうね」

そう答えたものの、哀は不安そうな顔をしている

そんな哀にコナンは

「大丈夫だって。いざとなったら俺がいるだろ？」

と言った

「そうね。護ってくれるんでしょ、名探偵さん？」

「ああ、もちろん」

コナンと哀は唇を重ねた

その後コナンと哀は明日の準備を整え、眠りに就いた

さっきまでの心配が現実になるとも知らずに…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4279f/>

変わらない愛を永遠に...

2010年10月28日06時40分発行